

[A年] 受難節第2主日(2021年2月28日)**【旧約聖書日課】イザヤ書35章1～10節**

- 1 荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ
野ばらの花を一面に咲かせよ。
- 2 花を咲かせ
大いに喜んで、声をあげよ。
砂漠はレバノンの栄光を与えられ
カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。
- 3 弱った手に力を込め
よろめく膝を強くせよ。
- 4 心おののく人々に言え。
「雄々しくあれ、恐れるな。
見よ、あなたたちの神を。
敵を打ち、悪に報いる神が来られる。
神は来て、あなたたちを救われる。」
- 5 そのとき、見えない人の目が開き
聞こえない人の耳が開く。
- 6 そのとき
歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。
口の利けなかった人が喜び歌う。
荒れ野に水が湧きいで
荒れ地に川が流れる。
- 7 熱した砂地は湖となり
乾いた地は水の湧くところとなる。
山犬がうずくまるところは
藁やパピルスパピルスの茂るところとなる。
- 8 そこに大路が敷かれる。
その道は聖なる道と呼ばれ
汚れた者がその道を通ることはない。
主御自身がその民に先立って歩まれ
愚か者がそこに迷い入ることはない。
- 9 そこに、獅子はおらず
獣が上って来て襲いかかることもない。
解き放たれた人々がそこを進み
- 10 主に贖われた人々は帰って来る。
とこしえの喜びを先頭に立てて
喜び歌いつつシオンに帰り着く。
喜びと楽しみが彼らを迎え
嘆きと悲しみは逃げ去る。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一3章1～10節

- 1 御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、
考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ば
れるほどで、事実また、そのとおりです。世がわ
たしたちを知らないのは、御父を知らなかったか
らです。2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神
の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示
されていません。しかし、御子が現れるとき、御

子に似た者となるということを知っています。な
ぜなら、そのとき御子をありのままに見るからで
す。3 御子にこの望みをかけている人は皆、御子が
清いように、自分を清めます。

4 罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、
法に背くことです。5 あなたがたも知っているよう
に、御子は罪を除くために現れました。御子には
罪がありません。6 御子の内にいつもいる人は皆、
罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たこ
ともなく、知ってもいません。7 子たちよ、だれに
も惑わされないようにしなさい。義を行う者は、
御子と同じように、正しい人です。8 罪を犯す者は
悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯している
からです。悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の
子が現れたのです。9 神から生まれた人は皆、罪を
犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるか
らです。この人は神から生まれたので、罪を犯す
ことができません。10 神の子たちと悪魔の子たち
の区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、
神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も
同様です。

【福音書日課】マタイによる福音書12章22～32節

22 そのとき、悪霊に取りつかれて目が見えず口
の利けない人が、イエスのところに連れられて来
て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見
えるようになった。23 群衆は皆驚いて、「この人は
ダビデの子ではないだろうか」と言った。24 しかし、
ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベ
ルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追
い出せはしない」と言った。25 イエスは、彼らの考
えを見抜いて言われた。「どんな国でも内輪で争
えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、
内輪で争えば成り立って行かない。26 サタンがサ
タンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふ
うでは、どうしてその国が成り立って行くだろう
か。27 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出す
のなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すの
か。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者とな
る。28 しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出して
いるのであれば、神の国はあなたたちのところに
来ているのだ。29 また、まず強い人を縛り上げな
ければ、どうしてその家に押し入って、家財道具を
奪い取ることができるだろうか。まず縛ってから、
その家を略奪するものだ。30 わたしに味方しない
者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者
は散らしている。31 だから、言うておく。人が犯す
罪や冒瀆は、どんなものでも赦されるが、“霊”に対
する冒瀆は赦されない。32 人の子に言い逆らう者
は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、こ
の世でも後の世でも赦されることがない。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書35章1～10節

- 1 荒れ野と乾いた地は喜び
砂漠は歓喜の声を上げ
野ばらのように花開く。
- 2 花は咲き溢れ
大いに喜びの歌声を上げる。
レバノンの栄光と
カルメルとシャロンの輝きが砂漠に与えられる。
人々は主の栄光と私たちの神の輝きを見る。
- 3 弱った手を強くし
萎えた膝を確かにせよ。
- 4 心を騒がせている者たちに言いなさい。
「強くあれ、恐れるな。
見よ、あなたがたの神を。
報復が、神の報いが来る。
神は来られ、あなたがたを救う。」
- 5 その時、見えない人の目は開けられ
聞こえない人の耳が開かれる。
- 6 その時、歩けなかい人は鹿のように跳びはね
口の利けない人の舌は歓喜を上げる。
荒れ野に水が
砂漠にも流れが湧き出る。
- 7 熱した砂地は池となり
干上がった土地は水の湧く所となる。
ジャッカルが伏していた所は
葦やバビルスが茂る所となる。
- 8 そこには大路が敷かれ
その道は聖なる道と呼ばれる。
汚れた者がそこを通ることはない。
それは、その道を行く者たちのものであり
愚かな者が迷い込むことはない。
- 9 そこに獅子はおらず
飢えた獣は上って来ず
..... これを見かけることもない。
贖われた者たちがそこを歩む。
- 10 主に贖い出された者たちが帰って来る。
歓声を上げながらシオンに入る。
その頭上にとこしえの喜びを戴きつつ。
喜びと楽しみが彼らに追いつき
悲しみと呻きは逃げ去る。

ヨハネの手紙一3章1～10節

- 1私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどれほどの愛をお与えくださったか、考えてみなさい。事実、私たちは神の子どもなのです。世が私たちが知らないのは、神〔別訳→御父、御子〕を知らなかったからです。2愛する人たち、私たちは今すでに神の子どもですが、私たちがどのようになるかは、まだ現わされていません。しかし、そ

のことが現わされる〔別訳→御子が現れる〕とき、私たちが神〔別訳→御子〕に似たものとなることは知っています。神〔別訳→御子〕をありのままに見るからです。3神〔別訳→御子〕にこの望みを抱く人は皆、御子が清いように自分を清くするのです。4罪を犯す者は皆、不法を行っています。罪とは不法のことです。5あなたがたが知っているように、御子は罪を取り除くために現れました。御子には罪がありません。6御子の内にとどまる人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たこともなく、知ってもいないのです。7子たちよ、誰にも惑わされないようにしなさい。義を行う者は、御子が正しいように正しい人です。8罪を犯す者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔の働きを滅ぼすためです。9神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にとどまっているからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。10これによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者は皆、神から出た者ではありません。きょうだいを愛さない者も同様です。

マタイによる福音書12章22～32節

22その時、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、連れられて来て、イエスが癒されると、ものが言え、目が見えるようになった。23群衆は皆驚いて、「まさか、この人がダビデの子ではあるまいか」と言った。24しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った。25イエスは、彼らの思いを知って言われた。「どんな国でも内輪で争えば荒れ果て、どんな町でも家でも、内輪で争えば立ち行かない。26サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。それでは、どうしてその国は立ち行けよう。27私がベルゼブルの力で悪霊を追い出しているのであれば、あなたがたの仲間〔直訳→子ら〕は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたがたを裁く者となる。28しかし、私が神の霊で悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなたがたのところに来たのだ。29また、まず強い人を縛り上げなければ、どうして家に入って家財道具を奪い取ることができるだろうか。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。30私と共にいない者は私に反対する者であり、私と共に集めない者は散らす者である。31だから、言うておく。人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦される。しかし、霊に対する冒瀆は赦されない。32また、人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも来たるべき世でも赦されることはない。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・2月28日「受難節第2主日」の日課主題は「悪と戦うキリスト」。「受難節」の教会では、伝統的に「悪魔祓い／悪霊払い／祓魔(エクソシズム)」の一般儀式が行われてきた。「祓魔」は、初代教会以来、主イエスが十二弟子に授与された「使徒」職に付随する権能の一つと理解されてきた(マタイ 10:1 ほか)。伝統的教会では、この初期教会の伝統を制度化し、一般に洗礼志願者が「洗礼」に先立って受け、また信者が再確認するための「祓魔」の儀式を「受難節」中に設定し、信者が悪魔・悪霊から神の庇護により守られることを祈り願うことが広く継承されてきた。一方、同じ「祓魔」であるが、特殊な「悪霊憑き」の個人に対して行われる儀式も広く行われてきたが、伝統的な教会ではこれを行うことができるのは許可を得た「祓魔師」に限るなど実践が制約されてきた。それは、「祓魔」が魔術的な様相を帯び、ときにその儀式が原因で身心の死傷に至る例が繰り返されてきたからであるが、現代でも非伝統的教会や、伝統的教会下にあっても民間宗教と結びついた教会共同体では、盛んに実践されている事例が知られている。「受難節」の聖書日課に「悪魔・悪霊・サタン」に関連する福音書箇所が設定されているのは、上述の「洗礼」準備のための一般儀式として行われる「祓魔の祈り」の習慣に基づいている。

旧約日課(イザヤ 35 章より)

・「イザヤ書」は、紀元前 8 世紀の北王国滅亡の時代に南王国で王宮に仕えた祭司・預言者イザヤの預言とそれに関連する「ヒゼキヤ王と預言者イザヤの物語」によって構成される前半(～39 章)と、紀元前 6 世紀の南王国滅亡～バビロン捕囚と解放・ユダヤ帰還の時代に「イザヤ」ら「預言者」の伝統を継承した預言者集団(おそらく、その継承に預言者エレミヤが大きな影響を与えた)が、同じ伝統に立つ立場で告知した預言をまとめた後半(40 章以下)に分けられる。前半を「第一イザヤ」、後半を「第二イザヤ」などと呼ぶことがある。日課箇所は、「第一イザヤ」の事実上の終結部で、36 章以下は列王記下 18 章以下と並行する「ヒゼキヤ王と預言者イザヤの物語」となる。

・前 8 世紀は、北王国を滅亡に至らせた帝国アッシリアの圧迫が続き、ヒゼキヤ王の時代(在位＝前 715～687 年頃)には南王国さえも滅亡する危機に瀕したが、かろうじて独立を保つことに成功し、国力を回復させて後半生の治世を終えている。「第一イザヤ」の預言者イザヤは、ヒゼキヤの曾祖父ウジヤ王の最晩年から預言活動(王宮で王に助言を告げることのできる立場)を行い、ヒゼキヤの父アハズ王の時代には政治に深く関与していたと考えられるが、さらにヒゼキヤ王の治世が対アッシリア籠城戦の混乱を経て安定していく時代まで「預言者」として王宮政治に関わった。日課箇所は、その預言者イザヤが、ヒゼキヤ王の治世が安

定していく時代を迎える中で告げられた「回復」の宣言としての預言であろう。

・「レバノン」「カルメル」「シャロン」などの地名は、33 章(9 節)では荒廃した様相を描き出すために取り上げられている。これらの地は、いわゆるフェニキア地方であり、ダビデ王の時代以来、南王国との間に深い結びつきを持ってきた海運都市国家群が形成されていたが、ユダ・イスラエルと共に、アッシリアの侵攻に悩まされてきていた。歴史的に、フェニキアの経済的豊かさは、王国時代のユダ・イスラエルの経済的安定や豊かさに直結している。また、フェニキアの都市国家の一つビュブロスは、「パピルス」の生産および貿易によってその名を知られるようになった都市で(それゆえに「書物」のことを「ビュブロス(パイブル)」と呼ぶようになった)、ユダ・イスラエルの王国文書は、フェニキア諸都市国家との深い結びつきがあってこそ大量に作成されるに至ったのである(当時のアッシリアの文書管理は、なお粘土板が主流であった)。

使徒書日課(Iヨハネ 3 章より)

・「ヨハネの手紙」は、三つの書簡文書に充てられた書名であるが、いずれの文書にも著者名は記されていない。ただ、「ヨハネ福音書」と共に、「ヨハネ」の名のもとに著述されたものとして伝承され、古代教会で共有されるに至った。「ヨハネ」の名による「福音書」と「手紙」には、一つの教会共同体で歴史的に起こっていたことを背景として想定させる記述が見られ、「福音書」に見られる改訂作業(もっとも明瞭なのは 21 章の付加)も、「ヨハネ」の教会共同体自身の営みとして完結されたものと考えられている。「ヨハネ」文書は、「ヨハネ」を特別な弟子として位置づけていると推測されるが、十二弟子の一人である「ヨハネ」を特定させるような記述は避けられている。一方で、「洗礼者ヨハネ」の存在感が共観福音書に比して大きく、主イエスを巡る信仰者を象徴的に代表させる存在として「ヨハネ」の名を位置づけようとしていると考えることができる。

・日課箇所を含めて、「ヨハネの手紙一」は、キリストを知る(信じる)ことでキリストと結ばれた信仰者が「神の子」と等しいものとされているという神学思想を強調している。「福音書」では、これを「父と子が一つになり、そこに弟子たちも加えられて一つになる」という表現で示している。「神の子」信仰者論は、西方教会(カトリック・プロテスタント)の主流神学では伝統的に強調されずにきたが、東方教会(ギリシア正教会系)では中心的な神学概念で、「洗礼」による「神人合一」ということさえ考えられている。そのような神学概念の聖書典拠の多くは、「ヨハネ」文書にある。

・「神の子」信仰者論は、ある種の聖潔主義を目指すため、対立概念として「光と闇」「神の子と悪魔」という二項対立的表現が用いられることがある。このような二項対立的な信仰世界観は、東方宗教の思想に基づく「グノーシス思想」の影響を受けていると考えられ、

「ヨハネの手紙一」は、そのような影響を強く受けると考えられるが、それに対して「ヨハネ福音書」は、教会共同体がそのような概念によって二陣営に対立しかねない状況の中で、共同体の一致を強調する改訂版として完成させられたと推測されている。「手紙一」は、「ヨハネ」の教会共同体の歴史におけるある時点の状況を切り取ったものとして理解し、その先にどのような道を選び取っていったのかを「福音書」を参考にしながら黙想することが求められる。

福音書日課(マタイ 12 章より)

・日課箇所は、共観福音書で並行して伝えられる「ベルゼブル論争」の逸話伝承。「マルコ福音書」がこの逸話を挟むようにして主イエスの身内(家族)が主イエスの言動を「気が変になっている」と言われて心配し連れて帰るためにやってきたという逸話を置いており、おそらく元来は、そのような文脈の中で伝承された逸話であろう。つまり、日課箇所の「論争」は、「主イエスの宣教で始められた新しい共同体(家族・家)とはいかなる原理によるものか」を示すためのものであって、「悪霊論」を巡って論争しているわけではない。

・「ベルゼブル」は、王下 1:3「バアル・ゼブブ(ヘブライ語で「蠅の王」の意)」と呼ばれているパルミラの最高神「バアル・ゼブ」を指すが、聖書・ユダヤ教の文脈では「異教・悪霊の首領」に位置づけられてきた。
・解釈上問題になるのは、冒流一般ではなく「聖霊冒流」だけが赦されざることとして強調されている 31~32 節の「霊／聖霊」が何を指すのかである。「聖霊」は、「マタイ」ではもっぱら「洗礼」と結びつけられた用語であり(マタイ 3:11、28:19。同 1:18 および 20 も参照)、ここに「聖霊」解釈のヒントがある。なお、この問題は「ルカ」では避けられている。この点は、「マルコ」に含まれない 27~28 節の「ルカ」との対照でも明瞭で、「マタイ」の「神の霊」が「ルカ」では「神の指」である。

来週の誕生日 (2月28日~3月6日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-294 番「ひとよ、汝が罪の」(= II 99 番)は、16 世紀宗教改革期のドイツの音楽家ハイデンがルターの説教に影響されて作った詞で、原詞は 22 節で構成された受難物語を歌う詞だが、讚美歌集には 1 節と最終節が採用されてきた。曲は、同時期の音楽家グライターの作で、1525 年発行の詩編歌集に詩編 36 編のための曲として作曲。グライターの、一時期プロテスタント教会に属し牧師職にも就いたが、後年カトリックに回帰した。
- ・21-284 番「荒れ野の中で」は、受難節の讚美歌として英米の讚美歌集で広く採用されている。作曲は、19 世紀インド生まれの聖職者スミタンとなっているが、フランシス・ポットが大幅に改作した詞が広く用いられている。
- ・21-100 番「聞きたまえわれらの祈り」は、9 世紀ごろから知られるラテン語聖歌を 19 世紀英国教会司祭

M.J.ブロッカーが英訳して用いたものが英国教会聖歌集に採用されて広く歌われるようになった。曲は、「ルーアンの教会旋律」として伝えられてフランス教会で用いられてきた旋律。

21-294「ひとよ、汝が罪の」

O Mensch, bewein dein Sünde gross

1. O Mensch, bewein dein Sünde groß, / darum Christus seins Vaters Schoß / äußert' und kam auf Erden; / von einer Jungfrau rein und zart / für uns er hier geboren ward, / er wollt der Mittler werden. / Den Toten er das Leben gab / und tat dabei all Krankheit ab, / bis sich die Zeit herdrange, / dass er für uns geopfert würd, / trüg unsrer Sünden schwere Bürd / wohl an dem Kreuze lange.
2. So lasst uns nun ihm dankbar sein, / dass er für uns litt solche Pein, / nach seinem Willen leben. / Auch lasst uns sein der Sünde feind, / weil uns Gotts Wort so helle scheint, / Tag, Nacht danach tun streben, / die Lieb erzeigen jedermann, / die Christus hat an uns getan / mit seinem Leiden, Sterben. / O Menschenkind, betracht das recht, / wie Gottes Zorn die Sünde schlägt, / tu dich davor bewahren!

21-284「荒れ野の中で」

Forty days and forty nights

1. Forty days and forty nights / you were fasting in the wild; / forty days and forty nights / tempted, and yet undefiled.
2. Shall not we your sorrow share / and from worldly joys abstain, / fasting with unceasing prayer, / strong with you to suffer pain?
3. Then if Satan on us press, / flesh or spirit to assail, / victor in the wilderness, / grant that we not faint nor fail!
4. So shall we have peace divine: / holier gladness ours shall be; / round us, too, shall angels shine, / such as served you faithfully.
5. Keep, O keep us, Savior dear, / ever constant by your side, / that with you we may appear / at the eternal Eastertide.

21-100「聞きたまえ、われらの祈り」

Christe cunctorum dominator alme

English version

1. Only-begotten, Word of God eternal, / Lord of creation, merciful and mighty: / Hear us, your servants, as our tuneful voices / Rise in your presence.
2. Holy this temple where our Lord is dwelling; / This is none other than the gate of heaven. / Ever your children, year by year rejoicing, / Chant in your temple.
3. This is your palace; here your presence-chamber. / Here may your servants, at the mystic banquet / Daily adoring, take your body broken, / Drink of your chalice.
4. Here for your children stands the holy laver, / Fountain of pardon for the guilt of nature; / Cleansed by whose water, springs a race anointed, / Faithful to Jesus.
5. Hear us, O Father, as we throng your temple. / By your past blessings, by your present bounty, / Smile on your children, and in grace and mercy / Hear our petition.
6. God in three Persons, Father everlasting, / Son co-eternal, ever-blessed Spirit: / To you be praises, thanks, and adoration, / Glory forever.